

C 五郎沼と嶋の堂千手観音

五郎沼の歴史と自然

C③ 五郎沼のハスのいわれ

文治3年(1187)、藤原秀衡は死に臨み、四代泰衡に源義経を主君とし仕えるよう遺言する。「…義顕(義経)を以主君と為、兩人給仕可くの由遺言有り…」(『玉葉』文治4年正月9日条)。しかし、泰衡は義経を高館に攻め、自害に追い込んだ。源頼朝は、義経をかくまったことを口実に平泉藤原氏討伐の兵を挙げた。

文治5年(1189)、頼朝の進軍に対し敗北の報を受けた泰衡は、平泉館に火を放ち、蝦夷島を目指して逃亡したが、家臣河田次郎の謀反によって斬首される。泰衡の首は、陣を敷いていた志波郡陣丘蜂社に届けられた。頼朝による首実検の後、長さ8寸の鉄釘を打ち付けられた(『吾妻鑑』文治5年9月6日条)。前額に指頭大、後頭部にさらに小さい円形の孔が存在することから、この首級は泰衡のものであることは確実とされている(埴原和郎「再考・藤原氏四代の遺体」『国際日本文化研究センター紀要』13)。

その首級桶から発見されたのが中尊寺ハスと命名された蓮の種子である。泰衡の首は、黒漆塗りの首級桶に納められ、中尊寺金色堂に納められた。同年9月10日、陣岡の蜂社に逗留していた源頼朝の宿に、中尊寺経蔵別当大法師心蓮らが謁見し、経蔵などの保護や農民らの無事を嘆願している(『吾妻鑑』文治5年9月10日条)。泰衡の首の処遇も併せて懇願したと推測される。近親者の手によって平泉に移されたのだろうか。

『吾妻鑑』によれば、泰衡の首は、「須すべからく其の首を進じ候と雖も、遼遠りょうえん之上させ、指る貴人に非。且は相傳の家人也。仍て進ずるに不能候。」(文治5年9月8日条)と記されている。頼朝は京都に対して、「首をお届けしたいが、遠方である上に、大層の身分の者でもない。しかも源氏代々の家来に過ぎず、お届けする必要もあるまい」と報告している。しかし、泰衡の首を刎ねた家臣河田次郎は、泰衡家来としての恩を忘れた愚拳であり、重罪に値するとして斬罪に処された。また、高水寺金堂の壁板を放ち取りした御家人家来は、左右の手を切断されている。これらの仕置から推測すれば、泰衡の首は当時の武士の戦陣作法や武家故実くぎょうに即して供饗くぎょうを使い、貴人として丁重な扱いと礼をもって中尊寺に引き渡されたと考えられないだろうか。

だれが蓮の花(種子)を首級桶に手向けたのが知る由もない。伝承のとおり、五郎沼の蓮池に咲いていた花だったのだろうか。長島時子氏は、「中尊寺近辺に生育していた野生のハスではないかと想像される」とする(長島時子「800年前のハス(中尊寺ハス)の開花」『恵泉女学園短期大学園芸生活学科研究紀要』Vol.32)。

泰衡が亡くなったのは、旧暦9月3日である。現在の10月下旬に相当する。蓮の花期はとうに過ぎている。